

朱子語類論文篇譯注 (七)

興膳宏

木津祐子

齋藤希史

京都大學  
國文學研究資料館

39 東坡作詩譏一昏闇之人、有句云「煙雨塞九竅。」黎

子詩。璘。

東坡はあるまぬけな人を嘲る詩を作ったが、その中に「煙雨 九竅を塞ぐ」という句がある。「黎璘子詩」のこと。璘記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「煙雨塞九竅」は、「弔李臺卿」詩(中華書局「蘇軾詩集」卷二)の「烟雨羅七竅」を指すであらう。ただし、嘲ったのは蘇軾でなく、周圍の人である。その序に「李臺卿、字明仲、廬州人。貌陋甚、性介犇、而博學強記、罕見其比。」

好左氏、有史學考正同異、多所發明。知天文律曆、千歲之日可坐數。軾謫居黃州、臺卿爲麻城主簿、始識之。既罷居於廬、而曹光州演甫以書報其亡。臺卿、光州之妻黨也」と記し、詩には「我初未識君、人以君爲笑。垂頭老鶴雀、烟雨羅七竅。敝衣來過我、危坐若持釣。楮裋半面新、屨蔑一語妙。徐徐涉其瀾、極望不可徼。却觀元嫵媚、士固難輕料。看書眼如月、罅隙靡不照。我老多遺忘、得君如再少。從橫通雜藝、甚博且知要。所恨言無文、至老幽不耀。其生世莫識、已死誰復弔。作詩遺故人、庶解俗子譏」とうたう。

「九竅」は、耳・目・口・鼻・尿道・肛門の九つの穴。「周禮」天官・疾醫に、「兩之以九竅之變」とあり、鄭玄は「陽竅七、陰竅二」と注する。右に記したとおり、もとの詩は、「七竅」である。

「黎璘子詩」は、未詳。「黎璘子」と表記すれば、レ、モン、のことだが、あるいは「李璘子」とかけたものか。

40 蜚卿問山谷詩、曰、「精絶。知他是用多少工夫。今人

卒乍如何及得。可謂巧合無餘、自成一家矣。但只是古詩較自在、山谷則刻意爲之。」又曰、「山谷詩忒好了。」道夫。

蜚卿が山谷の詩について尋ねると、いわれるには、「實に精妙だ。いったい彼はどれほど精力を費やしたのだろう。」

今の人ではそう簡単には及びようがないさ。文句ない巧みさで、一家を成すといつてよい。だが古詩はかなり自由に作るものなのに、山谷は苦心して作っている。またいわゆるには、「山谷の詩は、巧すぎるね。」楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 今人卒乍如何及得↓今人卒生如何及得(注) 「知……多少……」は、「不知……多少……」としても同意で、いったいどれほど……か、ということ。

「卒乍」は、すぐさま、簡単に。「或問鬼神有無。曰、「此豈卒乍可說。」(「鬼神」三・33)

「巧好無餘」の「無餘」は、強意。

「忒……了」は、「太……了」に同じ。

41 陳後山初見東坡時、詩不甚好。到得爲正字時、筆力高妙。如題趙大年所書高軒過圖云、「晚知畫書眞有益、却悔歲月來無多。」極有筆力。其中云「八二」者、乃大年行次也。雉。

陳後山が東坡に會つたばかりのころは、詩はあまりうまくなかった。正字の官に就くころには、筆力も高妙になった。「趙大年の畫く所の高軒過圖に題す」詩の、「晚<sup>ま</sup>く知る

畫書 眞に益有るを、却つて悔ゆ 歲月の來たること多く無きを。」という句などは、すばらしい筆力だ。その詩に「八二」とあるのは、大年の排行だ。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 晚知畫書眞有益↓晚知畫書眞有益 其中云八二者↓其中云□□(空格)者 及大平行次也↓及大平決也

(注) 蘇軾は元祐二(一〇八七)年に、「薦布衣陳師道狀」を書いて、陳師道を徐州教授に推薦している。

「正字」は、祕書省の官。從八品。典籍の校訂等を擔當。陳師道は、元符三(一一〇〇)年七月、棣州教授に除せられ十一月に祕書省正字に召されたが、翌建中靖國元年(一一二二)に歿した。

「趙大年」は、趙士暉、字は明發、太宗五世孫。書を米芾に學ぶ。「題趙大年所畫高軒過圖」は、「題明發高軒過圖」(「后山詩註」卷一一)。「詩話總龜」前集卷十九紀實門引「王直方詩話」は、この詩について、「初、無已謂餘曰、「近宗子節使使餘作一詩、皆掛名其間、得百千以爲女子嫁資可乎。」餘曰、「詩未成、則錢不可授。詩已成、則錢不可來。」數日無已卒、士暉贈以十縑。」と記す。なお、任淵「后山詩註」目錄該詩題下引「王立之詩話」(「王直方詩話」)は「后山作此詩、數月間遂卒。」といい、「詩話總龜」前集卷三四詩藏門引「王直方詩話」は、「陳無已賦高軒過詩云、「晚知畫書

眞有益、却怪歲月來無多。」不數月遂卒。」という。

「八二」は、「題明發高軒過圖」詩に「爾來八二復秀出、萬里河山才咫尺。」とあるのを指す。任淵は「八二當是明發行第一」と注する。

42 「閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游。」無己平時出行、覺有詩思、便急歸、擁被臥而思之、呻吟如病者、或累日而後成、眞是「閉門覓句」。如秦少游詩甚巧、亦謂之「對客揮毫」者、想他合下得句便巧。張文潛詩只「一筆寫去、重意重字皆不問、然好處亦是絶好。淳。

「門を閉して句を覓む 陳無己、客に對し毫を揮う 秦少游。」というが、無己はふだん外に出ていて、詩想が浮かぶと、とつて返して、蒲團をかぶつて考えこみ、病人のように呻きながら、時には何日もかかつてようやく詩が出来上がった。まさしく「門を閉じて句を覓む」だ。秦少游の詩はたいへん巧いが、「客に對し毫を揮う」というのは、彼はさつと巧い句を思いつくのだろう。張文潛の詩は一息に書き上げて、詩意や語句の重複などおかまいなしだが、好いところとなると絶妙だ。陳淳記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 平時出行↓平時行 亦謂之↓張文潛詩 ↓缺 淳(記錄者名) ↓義剛○陳淳錄同

(注) 「閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游。」は、黃庭堅「病起荆江亭即事十首」(豫章黃先生文集)卷七)の第八、「閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游。正字不知溫飽味、西風吹淚古藤州。」

「合下」は、ここでは「ただちに」「その場で」の意。「韓延壽傳云、「以期會爲大事。」某舊讀漢書、合下、便喜他這一句。」「(歷代)二二二五・3226)

「張文潛」は、張耒(一〇五四—一一一四)、文潛は字。楚州淮陰の人。蘇門四學士の一。その「賀方回樂府序」(張右史文集)卷五一)に「文章之于人、有滿心而發、肆口而成、不待思慮而工、不待雕琢而麗者、皆天理之自然、而情性之道也。」とあるごとく、作詩は平易自然を旨とした。「宋史」卷四四四。

43 陳博士在坡公之門、遠不及諸公。未說如秦黃之流、只如劉景文詩云、「四海共知霜滿鬢、重陽曾插菊花無。」陳詩無此句矣。其雜文亦自不及備論。道夫。

陳博士は坡公の門下では、諸公に遠くおよばない。秦(觀)・黃(庭堅)などはさておき、例えば劉景文の詩に

「四海 共に知る 霜 鬢に滿つるを、重陽 曾て菊花を挿すや無や」というが、陳の詩にこんな句はない。彼の各種の散文も詳しく論じるまでもない。楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 陳詩無此句矣↓何詩無此句矣

朝鮮古活字本 陳詩無此句矣↓何詩無此句矣

(注) 「陳博士」は、陳師道。「坡公」は、蘇軾。

「劉景文」は、劉季孫。景文は字。開封祥符の人。劉平の子。蘇軾に元祐五(一〇九〇)年付の「乞擢用劉季孫狀」(中華書局本「蘇軾文集」卷三二)があり、「年已五十有八」という。詩は「寄蘇內翰」、「宋文鑑」卷二五、「倦壓鰲頭請在符、笑尋穎尾爲西湖。一三賢守去非遠、六一清風今不孤。四海共知霜鬢滿、重陽曾插菊花無。聚星堂上誰先到、欲傍金罍倒玉壺」。なお、蘇軾の「記劉景文詩」(「蘇軾文集」卷六八)に「劉季孫景文、平之子也。慷慨奇士、博學能詩。僕薦之、得臨州以歿、哀哉。嘗有詩寄僕曰、「四海共知霜鬢滿、重陽能插菊花無。」死之日、家無一錢、但有書三萬軸、畫數百幅耳。」という。

「雜文」は、公式の場で用いる文章。官方の實用文。

44 「山谷集中贈覺範詩、乃覺範自作。」又曰、「山谷詩、乃洪駒父輩刪集。」剛。

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

「山谷の集に覺範に贈る詩があるが、あれは覺範の自作だな。」またいわれるには、「山谷の詩は、洪駒父たちが編纂したものだ。」陳剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 洪駒父↓洪毅 刪集↓刪集古今擬騷之作惟魯直爲無謂 剛(記錄者名)↓道夫

(注) 「覺範」は、釋惠洪(一〇七一—一一二八)。覺範は字、俗姓は彭。著に「石門文字禪」「冷齋夜話」など。

「贈覺範詩」は、「贈惠洪」と題して、「豫章黃先生文集」卷六と卷一一にそれぞれ一首ずつ見えるが、黃芻「山谷年譜」崇寧三年の條に兩詩を挙げ、卷六の詩について、「此篇載外集、曾端伯謂非先生所作。王父亦嘗刪去。漫附於此。」という(黃芻は黃庭堅の從孫であり、また朱子の弟子でもある)。卷六の詩は「吾年六十子方半、槁項頂髯忘歲年。韻勝不減秦少觀、氣爽絕類徐師川。不肯低頭拾卿相、又能落筆生雲煙。脫却衲衫著蓑笠、來佐涪翁刺釣船」、卷一一は「數面欣羊腩、論詩喜雉膏。眼橫湘水暮、雲獻楚天高。墮我玉麈尾、乞君宮錦袍。月清放舟舫、萬里渺雲濤。」

「洪駒父」は、洪芻、駒父は字、南昌の人。紹聖元(一一〇九四)年の進士。詩名高く、兄の朋・炎、弟の羽とともに四洪と稱される。母は黃庭堅の妹。「豫章黃先生文集」すなわち「山谷内集」三十卷は洪炎の編。

45 覺範詩如何及得參寥。義剛。

覺範の詩がどうして參寥の詩に及ぶものかね。黃義剛記す。

(注) 「參寥」は、釋道潛、參寥と號す。また字を參寥とすとも。俗姓は何氏、於潛の人。文章を善くし、ことに詩に巧みで、蘇軾や秦觀と交わつた。道潛の名はもと曇潛であつたものを蘇軾が改名させたという。『參寥子集』十二卷が傳わる。惠洪と參寥の優劣を述べたものとしては、例えば吳可『藏海詩話』に「子蒼云、若看參寥詩、則洪詩不堪看也」とある。子蒼は韓駒。

46 張文潛詩有好底多、但頗率爾、多重用字。如梁甫吟一篇、筆力極健。如云「永安受命堪垂涕、手挈庸兒是天意」等處、說得好、但結末差弱耳。又曰、「張文潛大詩好、崔德符小詩好。」又曰、「蘇子由詩有數篇、誤收在文潛集中。」雉。

「張文潛の詩にはうまいものが多いが、いささか大まかで、文字がよく重複している。「梁甫吟」の詩は、筆力がとてもしつかりしている。「永安に命を受くるは涕を垂るるに堪え、手に庸兒を挈たづうるは是れ天意なり」というあ

たりは、うまいものだが、結びがちよつと弱々しい。」またいわれるには、「張文潛は長い詩がよく、崔德符は短い詩がよい。」またいわれるには、「蘇子由の詩で間違つて文潛の集に入つてゐるのが數篇ある。」吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 又曰蘇子由詩有數篇、誤收在文潛集中、雉↓雉○又曰蘇子由詩有數篇沒收在(細字雙行)

朝鮮古活字本 又曰蘇子由詩↓細字雙行

(注) 底本は「又曰」以下を本文として扱うが、朝鮮古寫本・古活字本ともに注文であるのに従い底本を改めた。

「梁甫吟」は、『張右史文集』卷五。ただし「永安受命」を「永安受詔」に作る。なお、「永安受詔」は、諸葛亮が永安にて病床にあつた劉備を見舞つたおり、幼子と後事を託された故事をいう。その結びは、「……梁父吟、悲復悲。古今人事半如此、所以達士觀如遺。龐公可是無心者、何事鹿門招不歸。」

「崔德符」は、崔鷗(一〇五七—一一二二)、德符は字、號は婆娑、雍丘の人。詩文に長ず。元符年間の末、司馬光の無實を訴え、蔡京を批判したことで、免職となる。のち、政和年間に續溪縣令となり、靖康の初めには右正言となつた。著に「婆娑集」三十卷。『宋史』卷三五六。

「蘇子由詩有數篇……」は、いま詳らかにしない。ただし、查慎行は『蘇詩補注』卷四九の「古意」「再過泗上二首」「昭

陵六馬唐文皇戰馬也琢石象之立昭陵前客有持此石本示豫爲賦  
之」の注において、これらがいづれも張耒の集に見えること  
をいう。また、蘇軾は「答張文潛縣丞書」(『蘇軾文集』卷四  
九)において「甚矣、君之似子由也」という。

47 崔德符魚詩云、「小魚喜親人、可鉤亦可扛。大魚自有  
神、出沒不可量。」如此等作甚好、文鑑上却不收。不知如  
何正道理不取、只要巧。

崔德符の「魚詩」に、「小魚は喜んで人に親しみ、鉤る  
可く亦た扛ぐ可し。大魚は自づから神有り、出沒 量る可  
からず。」というが、こんな詩はたいへんうまいのに、「文  
鑑」は收めていない。なぜ道理を正す詩は採らずに、技巧  
ばかり求めるのだろうか。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 鉤↓釣

(注) 「魚詩」は、また「觀魚」とも。劉克莊『後村詩話』  
に、「崔德符詩、幽麗高遠、了不蹈襲、蓋用功最深者。觀魚  
云、「小魚喜親人、可鉤亦可網。大魚自有神、隱見誰能量。  
老禪雖無心、施食不肯嘗。時於千尋底、霍見如龍章。」と見  
える。

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

「文鑑」は、「宋文鑑」。呂祖謙撰。

48 潘邠老有一詩、一句說一事、更成甚詩。必大。

潘邠老の詩に、一句ごとにちがうことがらを述べたもの  
があるが、いったいあれが詩かね。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「潘邠老」は、潘大臨、邠老は字。弟の大觀とともに  
詩名高く、蘇軾・黃庭堅・張耒らと交わった。

49 古人詩中有句、今人詩更無句、只是一直說將去。這般  
詩、一日作百首也得。如陳簡齋詩、「亂雲交翠壁、細雨濕  
青(松)〔林〕」、「暖日薰楊柳、濃陰醉海棠」、他是什麼句  
法。雉。

古人の詩には句があるが、今の人の詩には句なんかなく  
て、ただそのまま述べていくだけだ。こんな詩なら、一日  
に百首だって作れる。陳簡齋の詩に、「亂雲 翠壁に交わ  
り、細雨 青林を濕す」とか「暖日 楊柳薰り、濃陰  
海棠に酔う」とかいうが、こりゃいったい何という句法だ。

吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 卷二三八作文一に有り 細雨濕青松↓

細雨濕青林

朝鮮古活字本 細雨濕青松↓細雨濕青林

本文を朝鮮古寫本・古字本により改めた。

(注) 「陳簡齋」は、陳與義(一〇九〇—一一三八)、字は去非、簡齋は號。『宋史』卷四四五。

「亂雲交翠壁、細雨濕青林」は、「岸幘」詩(『增廣箋注簡齋詩集』卷一八)、「暖日薰楊柳、濃陰醉海棠」は、「放慵」詩(『增廣箋注簡齋詩集』卷一〇)の句。ただし「濃陰」は「濃春」に作る。

50 「高宗最愛簡齋」客子光陰詩卷裏、杏花消息雨聲中。』又問坐間云、「簡齋墨梅詩、何者最勝」。或以「皐」字韻一首對。先生曰、「不如「相逢京洛渾依舊、惟恨緇塵染素衣」雉。

「高宗は簡齋の「客子の光陰 詩卷の裏、杏花の消息雨聲の中」の句を最も好まれた。また參會者一同に尋ねて、「簡齋の墨梅詩は、どれがいちばんよいかね」といわれた。ある者が「皐」字の韻の一首を擧げて答えた。先生

がいわれるには、「相逢えば 京洛 渾て舊に依る、惟だ恨む 緇塵 素衣を染むるを」には及ばんよ。」吳雉記す。

(注) 「客子光陰詩卷裏……」は、「懷天經智老因訪之」詩(『增廣箋注簡齋詩集』卷三〇)の句。

「坐間」は、一座の者。「先生問坐間學者云、「吾道一以貫之」、如何是「曾子但未知體之一處。」」「論語九 里仁篇 下 子曰參乎章」(一七・686)

「墨梅詩」は、「和張規臣水墨梅五絶」(『增廣箋注簡齋詩集』卷四)。「皐」字韻一首は、其四で、「含章簷下春風面、造化功成秋兔毫。意足不求顏色似、前身相馬九方皐。」「相逢京洛渾依舊……」は、其三。

51 劉叔通屢舉簡齋「六經在天如日月、萬事隨時更故新。江南丞相浮雲壞、洛下先生辛木春。」前謂荆公、後謂伊川。先生曰、「此詩固好、然也須與他分一箇是非始得。天下之理、那有兩箇都是。必有一箇非。」雉。

劉叔通はしばしば簡齋の「六經 天に在りては日月の如し、萬事 時に隨いて故新を更む。江南の丞相 浮雲壞れ、洛下の先生 辛木 春なり」を擧げた。前句は荆公を指し、後句は伊川を指す。先生がいわれるには、「この詩はもちろ

んうまいが、そこから一つの是非をはつきりさせなければだめだ。天下の理に、どうして二つとも正しいことがあるう。一つはかならず非だ。」吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 辛木↓辛本

(注) 「劉叔通」は、劉淮、叔通は字。建陽の人。朱熹の門下に學んだ。紹熙元(一一九〇)年の進士。

「六經在天如日月……」は、「無題」詩(『增廣箋注簡齋詩集』卷一七)。

52 有人過昭陵題絕句云、「桑麻不擾歲豐登、邊將無功吏不能。四十二年那忍說、西風吹淚過昭陵。」後來人說是劉信叔詩也。廣。

ある人が昭陵を通りかかったときの絶句に「桑麻擾れず歳は豊かに登り、邊將功無く 吏は能ならず。四十二年那ぞ説くに忍びん、西風 涙を吹きて昭陵を過ぐ」とある。後の人は劉信叔の詩だという。輔廣記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 桑麻不擾↓缺 末尾の「也」を缺く

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

(注) 「昭陵」は仁宗の陵。永昭陵。

「劉信叔」は、劉錡(一一〇七—一一六二)、信叔は字、德順の人。武將。紹興中、金軍を破って功績を擧げた。『宋史』卷三六六。

53 「政爾雪峰千百衆、澹然雲水一孤僧。」曾文清詩。璘。

「政爾まさしく雪峰 千百衆、澹然たる雲水 一孤僧。」これは曾文清の詩だ。滕璘記す。

(注) 「曾文清」は、曾幾(一一〇八—一一六六)、字は吉甫、河南の人、文清は諡。茶山居士と號す。『宋元學案』卷三四、「宋史」卷三八二。

「政爾雪峰千百衆」は、「空公長老一出即住雪峰、書來以建茗爲寄、長句奉呈空公、時以筆硯作佛事也」(『茶山集』卷五)の句。

「政爾」は、まさしく。「正爾」に同じ。

54 舉南軒詩云、「臥聽急雨打芭蕉。」先生曰、「此句不響。」曰、「不若作『臥聞急雨到芭蕉。』」又言、「南軒文字極易成。嘗見其就腿上起草、頃刻便就。」至。

南軒の詩に「臥して聽く 急雨 芭蕉を打つを」という



のを擧げると、先生がいわれるには、「この句にはめりは  
りがない。」「臥して聞こゆ 急雨 芭蕉に到るを」とし  
た方がよい」といわれた。またいわれるには、「南軒は詩  
をいとも安易に作つてしまふ。膝の上で書き始めるや、た  
ちまちでさるのを見たことがある。」楊至記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 腿↓髀 又言↓就↓細字雙行

(注) 「南軒」は、張栻(一一三三—一一八〇)、字は敬夫、  
南軒は號。「宋元學案」卷五〇、「宋史」卷四二九。

「臥聽急雨打芭蕉」は、「偶作」詩(「南軒集」卷七)。「世  
情易變如雲葉、官事無窮類海潮。退食北窓涼意滿、臥聽急雨  
打芭蕉。」

「響」は、アクセントがあるということ。七言詩では第五  
字の、五言詩では第三字の措字についていわれることが多い。  
「詩人玉屑」卷六「下字」に、「響字」の項があつて、「呂氏  
童蒙訓」を引く。「潘邠老云、七言詩第五字要響。如『返照  
入江翻石壁、歸雲擁樹失山村』、翻字失字、是響字也。五言  
詩第三字要響。如『圓荷浮小葉、細麥落輕花』、浮字落字、  
是響字也。所謂響者、致力處也。予竊以爲字字當活、活則字  
字自響。」

55 劉叔通江文卿二人皆能詩。叔通放體不拘東底詩好、文  
卿有格律人規矩底詩好。游開子蒙嘗和劉叔通詩、「昨夜劉  
郎叩角歌、朔雲寒雪滿山阿。文章無用乃如此、富貴不來爭  
奈何。雉錄又四句云、「邴鄭鄉嘗依北海、晁張今復事東坡。吹噓  
合有飛騰便、未用溪頭買釣簑。」此詩若遇蘇黃、須提掇他。文  
蔚。雉錄云、「先生屢稱之曰、「詩須不費力方好。此等使蘇黃見之、  
當賞音。人固有遇耳。」

劉叔通と江文卿の二人はどちらも詩がうまい。叔通は粹  
にとられない詩がよく、文卿はきつちりと格律のある詩  
がよい。游開子蒙がかつて劉叔通に唱和した詩に「昨夜  
劉郎 角を叩いて歌い、朔雲 寒雪 山阿に滿つ。文章  
の無用なること乃ち此くの如く、富貴來たらざるを爭奈何  
せん。吳雉の記録にはさらに「邴・鄭 郷に嘗て北海に依り、  
晁・張 今復た東坡に事う。吹噓すれば合に飛騰の便あるべし、  
未だ用いず 溪頭に釣簑を買うを」の四句がある。この詩はも  
し蘇(軾)や黃(庭堅)の目に觸れたら、きつと彼を引き  
立てただろう。陳文蔚記す。吳雉の記録には「先生はしばしば  
この詩をほめていわれるには、「詩は力が抜けているのがよい。」

これなどは蘇(軾)や黄(庭堅)が目にしたら、きつとほめただらう。人にはめぐりあわせというのがあるものだ。」という。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 劉叔通江文卿と和劉叔通詩と缺 朔雲寒雪滿山阿↓朔風思□(空格) 動山河 爭奈何↓當奈何 此詩若遇↓雉錄云↓此游開子藁詩 (末尾) ↓雉(記錄者名)

朝鮮古活字本 不費人↓不買人

〔注〕 「江文卿」は、建陽の人、李從禮の女婿。朱熹と交遊があった。『宋元學案補遺』卷六九。

「游開」は、字は子藁、建安の人、朱熹門下。『宋元學案補遺』卷六九。

「提掇」は、人を引き立てる。『語類』では、心をしゃやくとさせる意味で使われることが多い。「平日須提掇精神、莫令頹塌放倒、方可看得義理分明。」(論語二六 憲問篇 子路問君子章)四四・1147)

「詩須不費力方好」については、31條を参照。

56 方伯謨詩不及其父錢監公豪壯。黃子厚詩却老硬、只是太枯淡。徐思遠玉山人。與汝談、比諸人較好。思遠乃程克俊之甥、亦是有源流。雉。

方伯謨の詩は、父の錢監公の豪壯なものには及ばない。黃子厚の詩は齒ごたえはあるが、とにかく枯淡に過ぎる。徐

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

思遠玉山人と汝談は、ほかの人たちよりは、うまい。思遠は程克俊の甥のだが、やはり源流があるんだなあ。吳雉記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 汝談↓汝談詩宋子

朝鮮古活字本 黃子厚↓黃子垢 雉↓缺

〔注〕 「方伯謨」は、方士繇(一一四八―一一九九)、伯謨

は字、また字を伯休とも。莆田の人。朱熹に「祭方伯謨文」

〔文集〕卷八七)がある。『宋元學案』卷六九。

「錢監公」は、方豐之、字は德亨。方士繇の父。『宋元學

案』卷三六。

「黃子厚」は、黃銖(一一三二―一一九九)、子厚は字、

崇安の人。朱熹に「黃子厚詩序」(『文集』卷七六)、「祭黃子

厚文」(『文集』卷八七)がある。『宋元學案』卷四三。

「老硬」と「枯淡」については、『詩話總龜』卷九評論門

引「王直方詩話」に「余以謂圓熟多失之平易、老硬多失之乾

枯」とあるのが参考になろう。

「徐思遠」は、徐文卿、字は斯遠、號は玉山人、朱熹門下。

父は徐人傑。『宋元學案補遺』卷六九。

「汝談」は、趙汝談、字は履常、太宗八世孫、淳熙一一

(一一八四)年の進士。嘉熙元(一二三三)年卒。『宋元學

案』卷六九、『宋史』卷四一三。

「程克俊」は、字は元籟、浮梁の人、一〇八九―一一五七。

官は參知政事に至る。『宋元學案補遺』卷四五。

57 或問趙昌父徐斯遠韓仲止。曰、「昌父較懇惻。」又問三兄詩文。曰、「斯遠詩文雖小、畢竟清。」文蔚。

ある人が趙昌父・徐斯遠・韓仲止について尋ねた。いわれるには、「昌父がややまじめだ。」またこの三人の詩文についてたずねると、いわれるには、「斯遠の詩文は、小つぶだが、さすがに洗練されている。」陳文蔚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「趙昌父」は、趙蕃(一一四三—一二二九)、昌父は字、號は章泉。五十歳にして朱子に學ぶ。『宋元學案』卷五九、「宋史」卷四四五。

「韓仲止」は、韓澆(一一五九—一二三四)、仲止は字、號は澗泉。『宋元學案』卷五九。

「懇惻」は、ていねいなこと。「爲學須是痛切懇惻、做工夫、使飢忘食、渴忘飲、始得。」(「學二總論爲學之方」八・134)

58 「力推獐龍借水飲、手却猛虎奪石坐。」劉淳叟詩。雲谷有虎挨石、淳叟作此、自以爲好、不可曉。璘。

「力もて獐龍を推し水を借りて飲む、手もて猛虎を<sup>しりぞ</sup>却け石を奪いて坐る。」これは劉淳叟の詩だ。雲谷に虎挨石があつて、淳叟はこの詩を作り、自分ではうまいつもりだが、理解できんね。滕璘記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「劉淳叟」は、劉堯夫、淳叟は字、金溪の人。淳熙二(一一七五)年の進士。陸九淵に師事したが、のちに背き、禪を學んで遂に僧となつた。『宋元學案』卷七七。

「雲谷」は、建陽の蘆峰にある谷。朱熹がかつて草堂を結んだ。『宋詩紀事』卷四八。

59 谷簾水所以好處、某向欲作一首形容之、然極難言。大概到口便空又滑、然此兩字亦說未出。必大。

谷簾水がよいわけを、私は以前一首作つて表現しようとしたのだが、ことばにするのはじつに難しい。たいてい口にすると「空」ろで上「滑」りしてしまうものだが、この「空」「滑」なことばすら出てこない。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 一首↓一詩

〔注〕「谷簾水」は、廬山の康王谷の瀧。その水は茶を淹れるのに最もよいといわれる。

60 「龍衰新天子、羊裘老故人。」意味。道夫。

「龍衰の新天子、羊裘の老故人。」あじわいがある。楊道夫記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 意味↓缺

〔注〕「龍衰新天子……」は、吳棫の「嚴陵懷古」の句。「宋史紀事」卷二六引「釣臺集」に、「龍衰新天子、羊裘古野人。清名在林藪、高行動星辰。風月空齊地、烟霞自富春。滄浪秋更碧、不敢濯塵纓。」とある。なお、楊慎「升庵詩話」卷一二には、「宋人題釣臺詩曰、「龍衰新天子、羊裘老故人。」と引く。

61 「羣趨浴沂水、遙集舞雩風。」同安〔日〕〔簾〕試風乎舞雩詩。

「羣れ趨りて沂水に浴し、遙かに集う 舞雩の風。」同安の簾試で、「舞雩に風す」という出題に應じた作だ。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 日↓簾 同安↓詩↓細字雙行

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

朝鮮古活字本 日↓簾 舞雩詩↓舞雲詩

〔注〕 本文は朝鮮古寫本に従い、譯出した。

「浴沂水」「舞雩風」は「論語」先進篇の「莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而归」にもとづく。

「同安」は、福建省泉州の縣。朱子の最初の仕官が同安縣主簿であつた。「簾試」は、任官銓衡に際して、吏部の長官及び副長官の廳舎で行なわれる試験。

62 蔡京父子在京城之西兩坊對賜甲第四區、極天下土木之工。一曰太師第、乃京之自居也。二曰樞密第、乃攸之居也。三日駙馬第、乃儻之居也。四曰殿監第、乃攸子之居也。攸妻劉、乃明達明節之族、有寵、而二劉不能容、乃出嫁攸、權寵之盛亞之。京攸四第對開、金碧相照。嘗見上官仲恭詩一篇、其間有城西曲、言蔡氏奢侈敗亡之事、最爲豪健。末云、「君不見、喬木參天獨樂園、至今猶是溫公宅。」仲恭乃上官彥衡之子也、惜乎其詩不行於世。雉。

蔡京父子は京城の西の二つの坊に向かい合わせに四區畫の最高地を賜り、天下の土木の粹をきわめて造營した。その一を太師第といい、京の住居である。その二を樞密第と

いい、攸の住居である。その三を駙馬第といい、儻の住居である。その四を殿監第といい、攸の子の住居である。攸の妻の劉氏は、明達・明節の一族で、皇帝のご寵愛を蒙つたが、「明達・明節の」二人の劉氏が容認せぬため、攸に降嫁させたのだが、その權勢は明達・明節に次ぐものだった。京と攸の四つの屋敷は門が向かい合わせになっていて、黄金碧玉相映えるありさまだった。以前、上官仲恭の詩一篇を見たとき、その中に「城西曲」があつて、蔡氏の奢侈と衰亡のありさまを述べていたが、とても力強い。その終りに、「君見ずや、喬木 天に參わる 獨樂園、今に至るも猶お是れ溫公の宅」とある。仲恭は上官彥衡の子だが、残念なことにその詩は世に伝えられていない。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 攸妻↓妻 嫁攸↓嫁

(注) 「蔡京」は、字は元長、興化仙游の人。一〇四七—一〇六六。北宋の徽宗の下で權勢を振るつた。金と結んで遼を滅ぼしたが、かえつて金の侵攻を招き、北宋滅亡の姦臣とされる。「宋史」卷四七二。

「攸」は、字は居安、蔡京の長子。一〇七七—一一二六。「宋史」卷四七二。

「儻」は、蔡京の子。「宋史」卷四七二。

「攸子」は、蔡行のこと。攸の傳に、「子行領殿中監、視執政、寵信傾其父」という。「宋史」卷四七二。

「攸妻劉」は、攸の傳では、「妻宋氏出入禁掖」という。或いは宋氏の誤りか。

「明達明節」は、徽宗の愛妃、劉貴妃と劉安妃。「宋史」卷二四三。

「上官仲恭」は、上官悟、父は均、字は仲達のことか。周輝「清波別志」に「蔡京賜第在都城之東、周圍數十里。籍沒後、賜神師中、未及遷入、一夕煨燼無遺。時有上官悟作城東甲第曲、末四句云、皇天去人不盈尺、怙勢驕淫神所厄。君不見、喬木參天獨樂園、至今人道溫公宅。」とある。また、洪邁「容齋三筆」卷一五「題先聖廟詩」條に「豫頃在福州於呂虛已處、見邵武上官校書詩一冊、內一篇、題爲州西行。州西者蔡京所居處也。注云、靖康元年作。時京謫湖湘、子孫分竄外郡、所居第摧毀、索莫殆無人跡、故爲古調以傷之。凡三十餘韻、今但記其末聯云、君不見、喬木參天獨樂園、至今仍是溫公宅。」とある。

「上官彥衡」は、上官均、彥衡は字。熙寧三(一〇七〇)年の進士。

「溫公」は、司馬光。一〇一九—一〇八六。「獨樂園」は、洛陽にあった司馬光の邸宅。「司馬溫公文集」卷六六に「獨樂園記」がある。

63 本朝婦人能文、只有李易安與魏夫人。李有詩、大略云

「兩漢本繼紹、新室如贅疣」云云、「所以菀中散、至死薄殷周。」中散非湯武得國、引之以比王莽。如此等語、豈女子所能。

本朝の婦人で詩文に堪能なのは、李易安と魏夫人だけだ。

李には、あたまし「兩漢は本繼紹、新室は贅疣の如し、云々」といった詩がある。「所以ゆゑに菀中散は、死に至るも殷周を薄うとんず」とあるが、中散は湯王や武王の天下取得を非としたのを引いて、王莽になぞらえたのだ。こんなことばは、並みの女子にできることではない。

(校勘) 朝鮮古寫本 文只↓細字雙行

朝鮮古活字本 云云↓細字雙行

(注) 「李易安」は、李清照、易安居士と號す。一〇八四〇?。濟南の人、李格非の女、趙明誠の妻。「宋史」卷四四四。

「魏夫人」は、魏泰の姉、曾布の妻、襄陽の人。魯國夫人に封ぜらる。「宋史」卷四七一。

「兩漢本繼紹……」は、佚詩。「語類」等に引かれて、この四句のみが傳わる。

「菀中散」は、嵇康。「與山巨源絕交書」(「文選」卷四三)

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

に「又每非湯武而薄周孔」の句がある。

64 有鬼詩云、「鶯聲不逐春光老、花影長隨日脚流。」庚。

亡靈の詩に、「鶯聲 春光を逐わずして老い、花影 長く日脚に隨いて流る。」とある。林庚記す

(注) 「鬼詩」については、「六一詩話」に、「曼卿卒後、其故人有見之者、云恍惚如夢中、言我今爲鬼仙也。所主芙蓉城、欲呼故人往遊、不得、忿然騎一素驪去如飛。其後又云、降於亳州一舉子家、又呼舉子去、不得、因留詩一篇與之。余亦略記其一聯云、「鶯聲不逐春光老、花影長隨日脚流。」神仙事怪不可知、其詩頗類曼卿平生、舉子不能道也。」とある。

65 有僧月夜看海潮、得句云「沙邊月趁潮回」、而無對。

因看風飄木葉、乃云、「木末風隨葉下」、雖對不過、亦且如此。

ある僧が月夜に潮の満ちるのを見て、「沙邊の月 潮を趁おいて回る」という句を得たが、對になる句ができなかった。そこへ風が木の葉をひるがえすのが見えて、「木末の風 葉に隨まいて下る」と付けた。對句としてはいま一つだ

が、まあこんなもんだらう。

(校勘) 朝鮮古寫本 記録者名缺↓庚

(注) 「對不過」は、對になりきっていない、ということ。

66 問曾慥所編百家詩。曰、「只是他所見如此。他要無不會、詩詞文章字畫外、更編道書八十卷。又別有一書甚少、名八段錦、看了便真以爲是神仙不死底人。」

曾慥の編んだ『百家詩』について尋ねると、いわれるには、「彼の考えがこうだったというまでさ。彼は何でもやろうとして、詩詞・文章・書畫の他に、さらに『道書』八十卷を編んだ。また別に少部数の書物を出していて、『八段錦』というが、讀むとまったく不死の神仙のような人に見える。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「曾慥」は、字は端伯、晉江の人、至游子と號す？

一一一五五。

「百家詩」は、「本朝百家詩選」一百卷。「直齋書錄解題」卷一五は、「編此所以續荆公之詩選、而識鑑不高、去取無法、爲小傳略無義類、議論亦凡鄙。」という。

「道書八十卷」は、未詳。「直齋書錄解題」卷二二に、「道

樞二十卷、曾慥端伯撰。慥自號至游子、采諸家金丹・大藥・修鍊・般運之術、爲百二十二篇」と記すものと同様の書か。「八段錦」は、『郡齋讀書志』卷一六に「八段錦」一卷、右不題撰人。吐故納新之訣也。」とあるものか。

67 古樂府只是詩、中間却添許多泛聲。後來人怕失了那泛聲、逐一聲添箇實字、遂成長短句、今曲子便是。胡泳。

古樂府は詩に他ならないが、その中には合いの手の音聲がたくさん加えられている。後の人はその合いの手の音聲が失われてしまうのを恐れて、一つの音聲ごとに一つの實字を當てていき、それが長短句となったが、今の曲子詞がつまりこれだ。胡泳記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「泛聲」は、合いの手のように、メロディを繋いでリズムをとるための音聲。

「實字」は、音聲のみの「泛聲」に對して、固定した文字をあてはめることから「實字」と稱したもの。虚聲の對。

「胡泳」は、字は伯量、建昌の人。泳の名を持つ弟子には他に湯泳がいるため、例外的に姓も記している。

68 作詩間以數句適懷亦不妨。但不用多作、蓋便是陷溺爾。當其不應事時、平淡自攝、豈不勝如思量詩句。至如眞味發溢、又却與尋常好吟者不同。

詩を作る時には數句が心に適えばそれでよい。多く作る必要はない。多く作ると溺れてしまうからだ。ことがらにぴつたりくる句が浮かばなかつたら、あつさりと控えめにしておくほうが、詩句をあれこれひねくるよりいいんじゃないか。ほんとうの味わいがあふれ出るようにみなぎれば、そこらの月竝詩人とは違つてくるものだ。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「自攝」は、自制すること。

「不勝如」の「如」は、「於」に同じく、しよりも、ということ。

69 近世諸公作詩費工夫、要何用。元祐時有無限事合理會、諸公却盡日唱和而已。今言詩不必作、且道恐分了爲學工夫。然到極處、當自知作詩果無益。必大。

北宋の諸公が詩を作るのに力を費やしたのは、いったい何のためだったんだらう。元祐年間には處理すべきことが

朱子語類論文篇譯注(七)(興膳・木津・齋藤)

山ほどあつたのに、諸公は一日中詩の唱和で過ごした。いま詩は作らずともよいというのは、勉強の精力が削がれるのを慮つてということかね。けれども行き着くところまで行けば、詩を作つても役に立たないことが分かるはずだ。吳必大記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 且道恐分了↓且道恐分頭 自知作↓作

處知 必大(記錄者名) ↓伯豐

〔注〕 「元祐」は北宋哲宗期の年號。一〇八六年から一〇九四年まで。

「且道」は、それなら訊いてみるが、試しに訊くが、という意。

70 今人所以事事做得不好者、緣不識之故。只如箇詩、舉世之人盡命去奔去聲。做、只是無一箇人做得成詩。他是不識、好底將做不好底、不好底將做好底。這箇只是心裏鬧、不虛靜之故。不虛不靜故不明、不明故不識。若虛靜而明、便識好物事。雖百工技藝做得精者、也是他心虛理明、所以做得來精。心裏鬧、如何見得。儻。

今の人が何をしてもうまくできないのは、見識がないか



らだ。例えば詩にしても、世の人はみなやつきになつて作つてゐるが、だれもちゃんとした詩にはなつてゐない。見識がないから、いいものをよくないものに、よくないものをいいものにしてしまふ。これはとにかく心がざわついて、落ち着いてゐないせいだ。落ち着いてゐないからすじみちがはつきりせず、はつきりしないから、見識がない。もし心が落ち着いてすじみちがはつきりすれば、ものごとに対して見識ができる。さまざまな技藝の精妙にできる者でも、やはり心が落ち着きすじみちがはつきりしてゐるから、精妙にできるのだ。ところがざわついていれば、すじみちなど見えやしない。沈備記す。

(注) 「虚静」は、心を静かに落ち着けること。「明底人便明了。其他須是養。養、非是如何椎鑿用工、只是心虚静、久則自明。」(學六 持守「十一・204」)。  
「將做」は、「把做」「以做」などと同義。

71 詩社中人言、詩皆原於賡歌。今觀其詩、如何有此意。

〔江西〕詩社の人の言では、詩はすべて賡歌にもとづく

という。いま彼らの詩を見ると、どこが賡歌なものか。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「詩社」は、江西詩社。

「賡歌」は、人に唱和してうたうこと。「書」益稷謨に、「帝庸作歌曰、勅天之命、惟時惟幾。乃歌曰、股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉。皇陶拜手稽首颺言曰、念哉、率作興事、慎乃憲、欽哉、屢省乃成、欽哉。乃賡載歌曰、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉。又歌曰、元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墮哉。帝拜曰、兪往、欽哉。」とあり、また、「書集傳」に林之奇の説として「舜與臯陶之賡歌、三百篇之權輿也、學詩者當自此始。」という。林之奇は呂本中に師事し、やはり江西派の流れを汲む。さらに、陸九淵の「與程師書」(『象山全集』卷七)には「伏羲龍馭江西詩派一部二十家、……詩亦尙矣。原於賡歌、委於風雅、風雅之變、壅而溢焉者也。……由是江西遂以詩社名天下。」と記す。

72 作詩先用看李杜、如士人治本經。本既立、次第方可看蘇黃以次諸家詩。廣。敬仲同。

詩を作るにはまず李・杜を読むというのは、士人が經書を學ぶのと同じだ。基本ができてから、だんだんに蘇・黃、ついで諸家の詩へと進むがよい。輔廣記す。游敬仲も同じ。

73 因林擇之論趙昌父詩、曰、「今人不去講義理、只去學詩文、已落第二義。況又不去學好底、却只學去做那不好底。作詩不學六朝、又不學李杜、只學那曉崎底。今便學得十分好後、把作甚麼用。莫道更不好。如近時人學山谷詩、然又不學山谷好底、只學得那山谷不好處。」擇之云、「後山詩恁地深、他資質儘高、不知如何肯去學山谷。」曰、「後山雅健強似山谷、然氣力不似山谷較大、但却無山谷許多輕浮底意思。然若論敘事、又却不及山谷。山谷善敘事情、敘得盡、後山敘得較有疏處。若散文、則山谷大不及後山。淳錄云、「後山詩雅健勝山谷、無山谷瀟灑輕揚之態。然山谷氣力又較大、敘事詠物、頗盡事情。其散文又不及後山。」擇之云、「歐公好梅聖俞詩、然聖俞詩也多有未成就處。」曰、「聖俞詩不好底多。如河豚詩、當時諸公說道恁地好、據某看來、只似箇上門罵人底詩。只似脫了衣裳、上入門罵人父一般、初無深遠底意思。後山山谷好說文章、臨作文時、又氣餒了。老蘇不會說到下筆時做得却雄健。」義剛。淳略。

林擇之が趙昌父の詩を論じたおりに、いわれるには、「今の人は義理をさしおいて、ただ詩文を學ぼうとするが、それでも第二義に墮している。ましていいものを學ばずに、よくないものの眞似をするをやだ。詩を作るのに六朝を學ばず、李・杜も學ばず、もっぱらあんなわけのわからぬものを學んでいる。もしよく學び得たところで、それで何になる。さらに悪くなるのがおちというものだ。最近の人が山谷の詩を學んでも、山谷のよいものは學ばずに、ああした山谷の悪いところを學んでいるのはそれだ。」擇之が「後山の詩はあんなに深く、彼の資質はとても高いのに、どうして山谷を學ぼうとするのでしょうか」というと、いわれるには、「後山は力強いところは山谷にまさっているが、氣力が山谷ほど大きくない。だが山谷のようなやたら浮わついた趣きはない。けれども敘述力となると、やはり山谷に及ばない。山谷はことがらを述べるのがうまく、充分に述べ盡くすのだが、後山の敘述には大雜把などころがある。散文となると、山谷は後山に遠く及ばない。淳錄には、「後山の詩は力強さでは山谷にまさっており、山谷のよう

な瀟洒で浮薄なところがない。けれども山谷は氣力がなかなか大きく、敘事詠物は、ことごとくを述べ盡くしている。彼の散文は後山に及ばない。」という。擇之が、「歐公は梅聖俞の詩を好みました。聖俞の詩も至らないところが多くあります」というと、いわれるには、「聖俞の詩にはよくないものが多い。河豚の詩などは、當時の諸公はとてよといつたが、私から見れば、人の家に行つて人を罵るようなものだ。ちようど、服を脱いで、人の家に行つてその父親を罵るのと一緒で、深遠な意味など何もない。後山と山谷はよく文章を論じたが、いざ文章を作るとなると、腰砕けになつてしまふ。老蘇は（文を）論じたりしなかつたが、いざ書くとなると力強い。」黄義剛記す。陳淳は節略。

（校勘）朝鮮古寫本 不去學好底↓不知學好底 更不↓細字  
 雙行 曰後山雅健強↓先生曰後山雅健強 疏處↓疎處 山谷  
 大不及後山↓山谷人不及後山 淳錄云↓陳淳錄略「當時一時  
 所聞、今附于下云、今人不去講義理、只去學詩文、已落第二  
 等、況又不孝李杜只不好底詩、不知李詩、李得十分好便要  
 作何用、近世多孝山谷詩、然又不孝山谷好處只孝山谷不好  
 處」無山谷瀟洒↓尖洒 頗盡事情↓煩盡事情 「淳錄（陳

淳錄略の形）↓不及後山（細字部分）↓文末へ。曰↓先生  
 曰 據某看來↓據某說 只似箇上門罵人底詩↓只似个上人  
 門罵人底詩 上人門罵人父↓上人門罵人祖 淳略↓缺  
 朝鮮古活字本 瀟↓尖 上人門罵人父↓上人門罵人祖罵人  
 父

（注）「林擇之」は、林用中、字は擇之。福州古田の人。林  
 光朝に學び、のち朱熹に従學する。朱熹に「林用中字序」  
 「文集」卷七五）がある。「宋元學案補遺」卷六九。

「趙昌父」は、趙蕃。

「第二義」は、本筋でないこと。「讀書法篇上」3條を參  
 照。

「峴崎」は、ねじまがつていること。「讀書法篇下」88條  
 を參照。

「強似」は、まさる。「強如」に同じ。

「河豚詩」は、「范饒州坐中客語食河豚魚」詩（宛陵先生  
 集）卷五）。

編者後記

本稿作成にあたり、錢鷗・氏岡眞士・湯淺陽子・森賀一  
 恵・森田浩一各氏のレジュメを參考にした。謝意を表する。